Ensemble Contemporaryα リサイタルシリーズ vol.23

曽我部清典(trp.) 神田佳子(perc.) デュオリサイタル

■G.デュファイ:バラード「私の顔が蒼ざめているのは」(1430s)
G.Dufay:Ballade《Se la face ay pale》

■篠田 昌伸:Junction II for trumpet and percussion(2015 初演)
Masanobu Shinoda: Junction II

■伊藤 弘之:バラード『私の顔が蒼ざめているのは』による編曲(2015 初演)
G.Dufay=Hiroyuki Itoh:Ballade《Se la face ay pale》

■山本 裕之:パルラータ IV(2010)
Hiroyuki Yamamoto: Parlata IV

■斉木 由美:バラード『私の顔が蒼ざめているのは』による編曲(2015 初演)
G.Dufay=Yumi Saiki:《Se la face ay pale》

■神田 佳子:We are drummers 2 for trumpet and percussion(2014)
Yoshiko Kanda: We are drummers 2
=======

■近江 典彦:Il sokandabe artigianato(2015 初演)
Norihiko Ohmi:Il sokandabe artigianato

■田村 文生:バラード『私の顔が蒼ざめているのは』による編曲(2015 初演)
G.Dufay=Fumio Tamura:《Se la face ay pale》

■細川 俊夫:打楽器のための『線Ⅵ』(1993)
Toshio Hosokawa:Sen for percission

■川上 統:ベローシファカ(2015 初演)
Osamu Kawakami:Verreaux's sifaka

2015 年 6 月 24 日(水) けやきホール
主催:Ensemble Contemporary α
このコンサートはサントリー芸術財団の推薦コンサートです

ご挨拶

現代音楽の分野で、演奏・創作が一体となった活動を続けているアンサンブル・コンテンポラリーαは、アンサンブル公演に加え、1998年より「リサイタルシリーズ」を開始、以来、所属演奏家のリサイタルを重ねてきました。今年度、曽我部清典、神田佳子、共に現代音楽界で高い評価を得ている演奏家によるデュオ・リサイタルでは、篠田昌伸、近江典彦両氏への、またアンサンブル・コンテンポラリーαメンバーの川上統による委嘱新作に加え、リサイタルシリーズで好評を得ている編曲作品集において作曲メンバーがデュファイの作品に挑みます。これらに神田佳子、細川俊夫の作品が加わった、作曲家と演奏家の団体であるアンサンブル・コンテンポラリーαならではのプログラムをお楽しみ下さい。

Ensemble Contemporary α

@@

曽我部清典

@@

神田佳子

Programme notes

G.デュファイ：バラード『私の顔が蒼ざめているのは』

作曲者自身によって、その旋律がミサの定旋律として転用されたことで有名なバラード。ミサへの転用とは別に、このバラード自体は様々に変奏（編曲）され、鍵盤楽器で、或はショーム（オーボエ族）とトランペットで、また時にはトロンボーン、コルネット、ダルシアン（バスーン族）で、というように、ディファイの生きていた当時から様々な編曲が存在したようです。そして当然ながら、器楽で演奏された際には多くの装飾的な動きや音の変更も加えられました。このような、演奏実践の場で様々に編曲されていた事実や、後のミサへの転用の背景を持つ作品が、この演奏会のためにさらに「編曲」されることは、「原曲」と「編曲」との、或いは「編曲」と「編曲」との「間」の聴取の機会を聴衆に提供することになるでしょう。それは、既存の音楽が様々にリミックス（再創造）される現代において更に、聴く側の創造性の深まり、また、「聴く」という行為の広範さを示唆するのではないでしょうか。

さて、これまで、オケゲム、イギリス民謡、バッハと取り組んで来たアンサンブル・コンテンポラリー・アルファの作曲家たちによる『編曲プロジェクト』、今回は、斉木由美、田村文生、伊藤弘之の 3 人が、ルネサンス期ブルゴーニュ楽派の巨匠ギヨーム・デュファイの美しいシャンソン《Se la face ay pale（わたしの顔が蒼ざめているのは）》に取り組みました。原曲は3声で書かれていて歌と器楽によって演奏されます。これを曽我部さんと神田さんのリサイタル用に編曲するにあたり、打楽器はヴィブラフォンを主体にし、若干の小物楽器の追加は可能とするということだけ取り決め、あとはそれぞれが自由に編曲に取り組みました。結果として、「編曲」をどうとらえるかということも含め、三人三様の、かなり異なる 3 曲が出来上がったようです。

篠田 昌伸：Junction II

10 数年前、コンテンポラリーα黒田亜樹リサイタルにて、公募招待作品として、ピアノソロの為の「Junction」という作品を書いたことがあった。今回、安易にも同タイトルの「II」としたわけだが、Junctionにはもともと「合流点、接合点」といった意味があり、曽我部、神田両氏の強烈な個性が合流する場所として作品を設定することにした。トランペットと打楽器は、音程感、音色感やリズム細胞にいたるまで、互いに合流点を見いだそうとしながら進んでゆく。また、色々な要素がそれぞれの方向からやってきてはまた去っていく、いわゆる交通機関としてのジャンクションのイメージもあった。

全体を通して、ほぼ一貫して 5 拍子と 7 拍子の間を揺れ動きながら、綱渡り的な持続の中で、2 楽器は接合と分離を繰り返してゆく。スリリングな場となることを期待しつつ、書き進めた。

■篠田昌伸

東京藝術大学作曲科卒業、同大学院修了。作曲を尾高惇忠、土田英介の各氏に師事。第 74 回日本音楽コンクール作曲部門第1位、他多数入賞。06 年 just composed in YOKOHAMA 委嘱作曲家。10 年作曲グループ「クロノイ・プロトイ」メンバーとして、佐治敬三賞受賞。複数のグループ展や、演奏家、団体の委嘱等で作品発表を行う。またピアニストとして、多くの新作初演や、声楽、器楽の伴奏、コンテンポラリーダンスとのコラボ等も行っている。東京音楽大学、国立音楽大学、日本大学藝術学部、尚美ミュージックカレッジ、各非常勤講師。

伊藤 弘之：『私の顔が蒼ざめているのは』による編曲

今回私は、原曲の自然な美しさを活かすことを全面に押し出しながら、そこに、自分の創作上の興味である『揺れるイメージ』と『フラジリティ』を極力自然にブレンドさせるアプローチを選んだ。ミュートを付けたトランペットが儚げに奏でるメロディ（若干の四分音を含む）に、ヴィブラフォンのマレット奏と弓奏、それにいくつかのカウベルの音が、静かにほのかに揺らぎながら絡み、フラジャイルな質感とデリケートな凹凸を持つテクスチュアを織りなして行く。

■伊藤弘之

1963 年生まれ。カリフォルニア大学サンディエゴ校より博士号(Ph.D.)を得る。芥川作曲賞、ヌオヴェ・シンクロニー国際作曲コンクール第1位、シュティペンディエン賞(ダルムシュタット)などを受賞。サントリー音楽財団、全音楽譜出版社などをはじめ多数の団体や個人の演奏家たちから作曲委嘱を受け、アルディッティ弦楽四重奏団、新日本フィルをはじめとする優れた演奏団体や多くのソリストたちにより、国内外のさまざまな音楽祭やコンサートで作品が演奏されている。ミュージックスケイプとフォンテックから自作集 CD をリリース、共に好評を博している。昨年度東京で「音楽の展

覧会」(映像を交えた現代音楽の企画)をプロデュースし、注目を集めた。日本大学芸術学部教授。

山本 裕之:パルラーテⅣ

トランペット・ソロのための《パルラータ》(「話し方」の意)は、数曲をまとめて《パルラーテ》(「話し方」の複数形)という曲集になるもくろみで1999年より書き始められ、現在5曲ある。各曲それぞれ特定のミュートが用いられ、何かを話しているかのように頻繁に動かされる(ただし特定の言葉を模しているわけではない)。そもそも金管楽器の発音原理は人間の声帯と同じようなものなのだから、人間が歌を歌うのと同じように音をミュートで操作するのは何の特殊なことではないと思う(逆にミュートをつけないのは、人間でいえば口をあんぐり開けたまま発声し続けるのと同じである)。

Wha-wha ミュートを用いる《パルラータ IV》では、ミュートに差し込まれているステムと呼ばれる管の抜き差しも同時に行われる(これを完全に抜くと Harmon ミュートになる)ので、5 曲中最もミュート操作が複雑である。さらに微分音を多用しているため、音のコントロールが超人的に難しい。楽譜は1ページしかない。

■山本裕之

1967年生まれ、神奈川県出身。1992年東京芸術大学大学院作曲専攻修了。在学中、作曲を近藤譲、松下功の両氏に師事。武満徹作曲賞第1位(2002)、第13回芥川作曲賞(2003)。作品は日本、ヨーロッパ、北米等を中心に演奏されている。1990年より作曲家集団《TEMPUS NOVUM》に参加、2002年よりピアニスト中村和枝氏とのコラボレーション《claviarea》を行うなど、様々な活動を展開している。現在、愛知県立芸術大学准教授、Ensemble Contemporary αメンバー。いくつかの作品は M.A.P. Editions(ミラノ)から出版されている。

http://japanesecomposers.info

斉木 由美:『私の顔が蒼ざめているのは』による編曲

この曲は、世俗の歌でありながらも、美しいディスカント、典雅なリズム、三和音和声法の萌芽などの特徴を見ることができます。その中で私は、シャンソンとしての平易性(すなわち歌と伴奏)と、優美な雰囲気に注目し、新しい歌を作ろうと思いました。原曲のテノール主旋律は、音節の引き延ばしと音高の圧縮によって変形され、和音や多声的な書法は、完全5度を基調とする緩やかな響きに取り込まれます。原曲とは異なる静かな時間軸上にたゆたう、ゼフュロスの新しい歌と、打楽器の多彩な響きが、東洋的で雅やかな趣を醸してくれることでしょう。

■斉木由美

愛知県立芸術大学卒業後 1991 年渡仏。翌年パリ・エコールノルマル音楽院卒業後、パリ国立高等音楽院に入学、1995年同院作曲科を第一位指名の一等賞で首席卒業。2005 年には IRCAM 講習生として電子音楽と作曲について学ぶ。名古屋文化振興賞作曲賞、日本音楽コンクール、芥川作曲賞等を受賞。これまでに NHK 交響楽団、読売日本交響楽団、名古屋フィル、Music from Japan 、サントリー音楽財団等の団体や優れた演奏家から委嘱を受け新作を発表し、主要作品は、アジア、欧米のコンサートや音楽祭等で紹介されている。2014 年には岐阜現代美術館で室内楽作品による個展を開催。現在、東京藝術大学、国立音楽大学、及び大学院で後進の指導にあたっている。7月7日には、ALM RECORDS から、CD＜CONFESSION 斉木由美作品集＞がリリースされる。

神田 佳子:We are drummers 2

この作品は、箏の西陽子さんの委嘱により作曲された、遊び心をふんだんに取り入れたものであり、第 2 弾として、トランペットとの共演を 2014 年「神田佳子 PERCUSSION CONCERT かえるうまれた」コンサートで初演しました。

作曲にあたって、自らに課した条件は以下のとおりです。

1、手で持ち運ぶことが出来る、または、どこでも調達がしやすい打楽器を用いた作品。
2、スコアは4ページで短めな作品。
3、2人で楽しく演奏出来る作品。

今回は、ゴージャスに巨大バケツ(マッキントッシュの元祖ゴミ箱アイコンのモデルといわれている)で挑みたいと思います。トランペットドラム化作戦のために、楽器をお借りしたり、研究にお付き合い頂きました曽我部さんに感謝致します。

近江 典彦:Il sokandabe artigianato

この曲は、一言で言うとアフリカ系会話とアラブ的に変化させた12音を使った四分音複雑 trp とローグローバリゼーション(と想像している)された打楽器即興の曲で、sokandabe というのは、初演の曽我部さんと神田さんを文字ったもので、artigianato は手工芸品ということで、作曲の近江と合わせて3人で創り上げる芸術品とでも言いましょうか、近江が下地を作り、トランペットは定量記譜化された複雑なグローバリゼーションされた旋律を歌い、パーカッションはそれを奏者独自の視点・手法で盛り立てるものである。

■近江典彦

1984 年生まれ。東京音楽大学を卒業し、現在同大学講師。Ensemnable Factory 代表。

田村 文生:『私の顔が蒼ざめているのは』による編曲

この編曲は原曲の旋律の、或は2声以上の旋律的関係を示す動きの断片を基にし、自由な変奏を加えたものです。拡大・圧縮・反行・逆行・移旋など、様々に変奏が加えられた旋律の断片は、当然のことながらその源泉が特定不能なものになり、結果的に原曲とは非常にかけ離れたものとなりました。しかしその中でも、原曲に見られる特徴的な音型や音程を発見することも可能であるかも知れません。また同時に、ある断片が異なった文脈に置かれることにより、原曲ではおよそ顧みられなかった動きが、音楽の前景に表れてくる、といった異質な効果もまた楽しめるのではないかと思います。

■田村文生

東京藝術大学大学院、及び Guildhall School of Music and Drama, London 大学院修了。作品はアジア音楽祭、東京の夏音楽祭、Spitalfields 音楽祭、ISCM 等で演奏されたほか、Vallentino Bucchi 国際作曲コンクール、文化庁舞台芸術創作奨励特別賞、朝日作曲賞、ジェネシスオペラ作曲賞などに入選・入賞。神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授。

細川 俊夫:打楽器のための「線Ⅵ」

細川俊夫が 1984 年から 1993 年にかけて独奏楽器のために作曲した「線」シリーズの第6作目が、この打楽器のための「線」である。細川のいう「空間と時間への音の書道(カリグラフィー)」は、本作品のように打楽器のための作品でそれは最も発揮されると言えよう。「そのとき、目に見える白紙に残された「線」は全体の線運動の一部にすぎない。目に見える世界、耳に聴こえる世界は、世界の一パーセントにすぎない。(中略)聴こえてくる音は、その目に見える「線」の部分だろう。そして聴こえる世界は、聴こえない世界の一部分にすぎない。」とする細川はこの曲で、空間に描かれた、見えない・聞こえない「線」と、その一部としての点(発音)から発し、音が時空へ現前する際の関ぎを表すかのような「摩擦」を経て、やがて点と線が交錯する即興へと移行してゆく。

■細川俊夫
ベルリン芸術大学でユン･イサンに、フライブルク音楽大学でクラウス･フーバーに作曲を師事。日本を代表する作曲家として、欧米の主要なオーケストラ、音楽祭、オペラ劇場等から次々と委嘱を受け、国際的に高い評価を得ている。2001 年にドイツ･ベルリンの芸術アカデミー会員に選ばれる。2012 年秋、紫綬褒章を受章。ネーデルラント･フィルハーモニー管弦楽団 2013/2014 シーズンのコンポーザー･イン･レジデンス。現在、武生国際音楽祭音楽監督、東京音楽大学およびエリザベト音楽大学客員教授。

川上　統：ベローシファカ

マダガスカル島。そこにはあまりに固有種が多く、生物が好きな人間ならば恐らく誰もが憧れる地です。そのマダガスカルに住む生物の中でも原猿類の固有種の一群がなかなか特徴的であり、キツネザルの仲間の顔立ちは名前の通りキツネのようなサルのような顔をしていて、霊長類の大先輩としての風格があるように思います。そのキツネザル達の仲間の中にこのベローシファカという種類のサルがおりまして、主に樹上に棲み凄まじいジャンプカで樹から樹へと跳び移動します。しかしこのシファカの最も面白い動きになるのが地上に降りた時であり、地面で移動する時には上手く歩けず、小走りに横っ飛びで跳ねながら移動するのですが、その様が樹上の巧みなジャンプとは違い、非常にコミカルに見えます。また顔立ちが目が丸いキツネのように見え、真顔のような表情で樹の上と地面をひょこひょこと跳ねていく様は非常にシュールな風合いを持っています。打楽器には低めのログドラムを用意し、樹が音となってもこもこと林立する中をトランペットがひょこひょこと移動するように作りました。

■川上統
1979 年目黒生まれ。逗子育ち。東京音楽大学作曲指揮専攻卒業、同大学院修了。作曲を湯浅譲二、池辺晋一郎、細川俊夫、久田典子、山本裕之の各氏に師事。 第 20 回現音新人作曲賞受賞。2009、2012 年、武生国際音楽祭招待作曲家。 作品は国内外で演奏され、作品名は生物の名が多い。Tokyo Ensemnable Factory ミュージカルアドヴァイザー。現在、国立音楽大学非常勤講師、東京音楽大学付属高等学校非常勤講師

曽我部 清典
Kiyonori Sokabe

東京芸術大学音楽学部器楽科卒業。ムジカ･プラクティカのメンバーとして芸大在学中より国内外の新作初演に数多く携わる。ALM レーベルより4枚のソロCDをリリース、レコード芸術･音楽芸術などで特選盤の評価を受けた。

2001 年より度々ヨーロッパ主要都市でソロリサイタルを行う。現在、ピアニスト堀江真理子、ギタリスト山田岳とのデュオリサイタルシリーズ進行中。ブラスエクストリームトウキョウ代表、上野の森ブラスコンサートマスター、双子座三重奏団、トリオゼフュロスメンバー。洗足学園音楽大学講師、日本トランペット協会常任理事。新居浜市総合文化施設アートディレクター。http://www.jade.dti.ne.jp~ebakos/

神田 佳子
Yoshiko Kanda

横浜生まれ。東京芸術大学音楽学部器楽科打楽器専攻卒業及び同大学院修了。ドイツ：ダルムシュタット国際現代音楽夏期講習会で奨学生賞を 2 度受賞。これまでに、ソリストとして東京フィルハーモニー交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団等と共演、東京オペラシティ主催リサイタルシリーズ「B→C」、NHK「FM リサイ タル」、TV 朝日「題名のない音楽会」などに出演。2002 年ビクターエンタテインメントよりヴァイオリンと打楽器の CD「ソルト&ペッパー」をリリース。古楽集団トロヴァトーリ･レヴァンティ、といぼっくす、高橋悠治プロデュースの伝統楽器グループ「糸」、一柳慧率いる「アンサンブル･オリジン」等のメンバーとして、カーネギーホールをはじめ、国際的な場での演奏活動も多数行ってきた。現代音楽を軸に、様々な分野での即興演奏や、正倉院復元楽器の演奏、ジャズミュージシャンとの共演等、時代やジャンルを超えた打楽器演奏の可能性にアプローチしている。

現在、Ensemble Contemporary α、東京現音計画、 PERCUSSION TRIO [The Birds]、ジャズピアノとのデュオ「TANAKANDA」等のメンバー。また、演奏活動と並行して作曲活動も継続的に行っており、作品は、日本国内各地をはじめ、ニューヨーク、ミラノ他世界各地で上演されている。2014 年には自作の打楽器アンサンブル作品集 CD「かえるのうた」をリリースし、その中の Emotion 等4作品の楽譜も出版された。Web サイト：http://www.yoshiko- kanda.com/

Ensemble Contemporary α

東京を拠点に活動し、20 世紀以降の音楽を専門とする現代音楽専門の室内アンサンブル。17 名の演奏メンバーと 12s名の作曲メンバーによって構成される。作曲メンバーが、アンサンブルの運営とプログラミングを手がけ、演奏メンバーとの密接な共同作業のもと活動を展開している。1994 年の発足以来これまで演奏した作品は 200 曲以上に及び、作曲メンバーの作品だけでなく、世界各国のさまざまな作曲家たちの作品を取り上げて来た。2007 年には韓国女性作曲家協会主催コンサート(ソウル)に、また 2010 年･2013 年にテグ国際現代音楽祭に、また 2013 年にはソウルコンピューター音楽祭にも招待された。演奏メンバーのリサイタル公演とアンサンブル公演による活動は各方面より好評を得ている。http://alpha.cside.com/

演奏メンバー：多久潤一朗 fl. 宮村和宏 ob. 遠藤文江･鈴木生子 cl. 塚原里江 bn. 曽我部清典 trp. 池上亘 trb. 神田佳子 perc.
及川夕美･黒田亜樹 pf. 佐藤まどか･野口千代光･花田和加子 vln. 安藤裕子 vla. 松本卓以･岩永知樹 vc. 柳澤智之 db.

作曲メンバー：田村文生（代表） 伊藤弘之（副代表） 大村久美子 金子仁美 川上統 斉木由美 鈴木純明 堰合聡 鷹羽弘晃
星谷丈生 山本裕之 米倉香織 （マネージメント･アドヴァイザー 境野顕）